

愛媛大学
文学部
教授
博士

仲田庸幸 著

源氏物語の文芸的研究

風間書房

源氏物語の文芸的研究

定価二二〇〇円

著者 仲田庸幸

発行者 風間歳次郎

印刷者 中内佐光

発行所

株式会社
風間書房

東京都千代田区神田神保町一の三四
振替東京一八五三番
電話(元)五七二九番

昭和37年9月10日 印刷
昭和37年9月15日 発行

(睨印刷・有朋製本)

緒言

源氏物語の文芸的研究に当たって先ず考えられることは、対象と方法である。紫式部の原本の発見されない限り、青表紙本にしても河内本にしてもいわゆる別本にしても、対象そのものからして問題は多いのであるが、ここで重視したいのは、鎌倉初期から写本として伝えられた一つのまとまりを持つ源氏物語が現実にあるということである。本研究では、その現行のものを対象として、それが文芸的にいかなる意義と価値とを持っているかを、体系を立て実証的に追究することに努めた。テキストとして選んだ吉沢義則博士の「校源氏物語新釈」をはじめ引用諸文献も逐一頁数を入れたのも、その拠点に立ってそのような論断を下すに至ったことを明らかにするためである。恣意独断を排して客観的に合理的にということは、本研究においても当然守るべき鉄則であり、特に意を用いた。

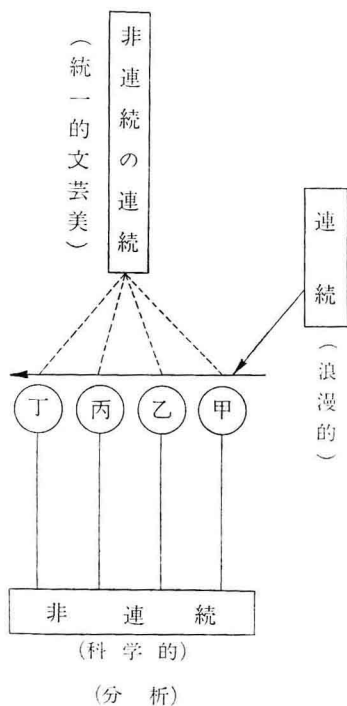
文芸的研究の狙いは、文芸的統一美の追究にある。本研究でも、その立場から、主題・構想・叙述をはじめいろいろな問題を、さまざまな角度から吟味するために、テキストを中心とする対象を凝視し、それに沈潜して、源氏物語そのものの文芸的統一美追究に努めた。それが、安易な解釈や単なる印象批評に陥らぬようにするために、直観・分析・総合の理解研究過程を厳重に追った。また、従来の文芸的研究が持つ脆弱性を検討して、科学的合理的批判にも堪え得るように努めると共に、常に新たな問題を発掘して試論や新解釈を試みるように苦心した。

本研究に一貫して強調した新たな見方は、非連続の連続の文芸観である。この源氏物語における非連続の連続の文芸観は、長年前からわたくしのささやかな研究をつづけてきた新たな文芸観であり、この物語の文芸的研究の核心を

衝くものであると思うが、未だ熟さず、理論構築には今後の研究に俟つべき点が多い。序論の第四節には、やや集中的にこの文芸観について述べたが、ここでも簡単にその要点にふれて置きたい。源氏物語の文芸的研究も、先ず対象を凝視しそれに沈潜すべきであることは前述の通りである。従来この研究は、たとえば更級日記の如く、印象批評を重視して連続の相から追究するか、さもなければ科学的合理的な研究に名を藉って文献学的に分析を重視し非連続の相からの追究かであった。前者は、文芸的統一美の把握のし方が、物語に没入して、懷疑もしくは否定を媒介としないために、主観的浪漫的に安易に流れて筋の純粹持続を追い勝ちで、科学的合理的な基礎の検討を怠る弱点があるのに反し、後者は、科学的合理的に分析をするのに急で、全体としての文芸的統一美を逸する憾みも起こり勝ちであった。

わたくしの提唱する非連続の連続の文芸観は、前兩者を重視しながら、一応兩者をそのままの立場においては否定し、新たな一全体としての高次の文芸的統一美という立場から兩者をこれに寄与する程度に応じて蘇らすとする見方である。絶対に相反すると考えられるものの根底には、絶対に同じものというような意味がなければならぬことは容易に考えられることで、同一根元から出発して相対立する兩者を、より高次の次元において統一するということも亦当然考えられることである。非連続の連続の文芸観は、その高次の文芸的統一原理なのである。

わたくしの新提唱による非連続の連続の文芸観は、高次の次元において文芸美の統一をするというところに特色がある。それは、従来の連続の相における見方乃至は非連続の相における見方とどう異なるかを明らかにしておきたい。便宜上、次頁の図表によって説明を試みてみよう。即ち、連続の相から見る立場は、更級日記等にも見るように物語に没入する情熱的な美点はあるが、その内容の、甲乙丙丁というような物語の基底に存在する個々のものがあり



のままに見ないで、情緒的に筋を追ひ、主観的に浪漫的にそして印象批評的になめらかに表面をすべるように研究を進めてゆく。懷疑や否定を媒介とせず、反論を試みようとしめない。統一が安易で、厳しい吟味がない。仔細に見れば、個々のものは相互に背反したり孤立したり色彩を異にしたりしている場合が多いのに、一見不統一な存在は無視し勝ちで、物語の筋の純粹持続乃至發展を情緒的浪漫的に追ひ、客観的科学的合理的検討を欠く。これに反し、非連続の相から見る立場は、孤立したり背反したり色彩を異にしたりしている個々のものを、実存の相において克明に認識する点に特色がある。殊に科学的合理的な厳しい分析乃至は否定や懷疑を媒介として、個々の相を徹底的に究明し、矛盾するものや背反するものや色彩を異にするものが真実どのようなものであり、それは何に因由するか等を論証するところにこの立場の近代的研究法の犀利さを示すが、高次の統一的文芸美に眼を向けず、物語の生命を寸断して顧みない憾みがある。わが非連続の連続の文芸観は、連続の相からの見方とは孤立したり背反したり色彩を異にしたりする個々のものを存在の相において吟味したり科学的合理的な基礎を検討したりする点において異なる。また、非連続の相の見方とは、物語の生命を重視し、高次の統一的文芸美を追究する点において異なる。つまり、非連続の連続の文芸観は、前兩者を重視しながら、それぞれの使命に死なせてそのままの立場においては否定し、新たな一全体としての高次の文芸的統一美という立場から兩者

をそれぞれこれに寄与する程度に応じて蘇らせるとする見方である。科学的・合理的基礎を吟味し、個々の背反したり孤立したり色彩を異にしたりする特質を見極めながらも、高い次元に立っての統一的文芸美を追究する文芸観である。この非連続の連続の文芸観に立つ研究にあつては、たとえば源氏物語の如き勝れた文芸作品である限り、一方では科学的・合理的・帰納的に追究すると共に、他方では必ず高い次元の統一美が存在するという予想と信念との上に立って研究するものである。そしてその立場に立って、個々の存在の如く見える非連続の相の中に一元的な生命で統べられた高次の連続の相——統一的な美——を発見することに努めるのであり、そのことのため研究方法については十分考慮して学術的公正を期せねばならない。

学術的研究において、体系に基づいての微視的局所的視圈に立つ研究は、極めて大切であり、徹底すべきである。それらを、一応それぞれの使命に死なせて、巨視的視圈に立ち、全一としての統一美という大きな新たな高い立場から、その目的に寄与する程度に応じて蘇らせるところに、非連続の連続の文芸観の特色があり、その手法の妙味がある。作者紫式部が、大胆な捨象や省筆や添加等によってこの手法を生かして、源氏物語の文芸性を高度にすると共にユニークなものにしていることも、大いに注目すべきである。

たとえば、雨夜の品定めでも、形は法華経の三周説法の型を取ったがそれに執せず、内容にしても、表は真面目な妻室論女性観を述べながら、裏は探恋癖の誘発物語であり、それらの非連続の連続の文芸的統一美を出しているところ、この帖の独自の意義と価値とがある。短編と短編の長編化の問題でも、非連続的には、短編として絶対的な意義と価値を持つけれども、連続的には、源氏物語全帖の部分としての相対的過程的意義と価値としか考えられず、この物語全体の文芸的意義と価値とからは、非連続の連続の文芸観から再検討の必要が起こつて来、最終的な意義と

価値とは、相当に変わって来るであらう。このような非連続の連続の文芸的研究は、科学的合理的な基礎的研究の上に立って進められねばならないが、特に作品と作者とその背後の歴史的社会的条件の三者の関連も深い考慮を払う必要がある。

要するに、この源氏物語の文芸的研究は、非連続の連続という、わたくしの新たな文芸観に立っての拙い研究である。一応、前述のような目標を立てて研究を進めてはみたが、書きあげたものを通読してみると、意に満たない点が多く、他方先学の深い研究に対しても誤り解した点も多いのではないかと、かつは菲才を嘆き、かつは深くおそれる次第である。終りに、この未熟な研究を進めるに当たり、常に親切にご指導下さった文学博士斎藤清衛・同土井忠生・同重松信弘の三先生をはじめ、直接間接ご指導ご鞭撻下さった多くの先生方に心から感謝申し上げる。猶、今回も校正などを手伝って下さった新居田正徳・石田精二の両君にも、末筆ながら謝意を表する次第である。

一九六二年七月三十日

仲田庸幸

目次

序論 源氏物語研究の方法……………一

第一節 対象と方法……………一

——本文と青表紙本及び河内本——……………一

一 青表紙本重視の歴史的現実と根拠……………一

二 価値観に立つ文献学的研究と文芸的研究——源氏物語と平家物語との比較——……………四

三 河内本の価値と問題点……………一三

四 親行校合の新古今集の八本と源氏物語の八本……………三三

第二節 源氏物語成立時についての一考察(上)……………三三

一 源氏物語執筆時の短期説と長期説……………三三

 (一) 執筆の始終期と初出仕の時期……………三三

 (二) 短期執筆説と問題点……………三三

 (三) 長期執筆説と新執筆段階説……………三三

二 源氏物語成立時推定の条件……………五九

 (一) 人間的条件……………五九

- (一) 歴史的条件
- (二) 文芸的条件
- (四) 思想的条件

第三節 源氏物語成立時についての一考察(下) 六六

三 源氏物語正編成立の時期..... 六六

- (一) 寛弘五年正編一部成立説
- (二) 寛弘五年正編成立説
- (三) 寛弘五年全帖成立説・附宇治十帖成立期

四 源氏物語正編成立期推定の文芸的意義..... 六九

第四節 源氏物語の文芸性と非連続の連続

—蜻蛉日記と比較しつつ— 一〇六

- (一) 苦悩する女性の個性の解放の問題の提出のし方と非連続の連続
- (二) 美の文芸的追究のし方(岡崎博士の説を中心に)と歴史学派の批判
- (三) アイデアリスティック乃至ロマンティックな面(島津博士の説を中心に)の得失と印象批評
- (四) 自己の宿命への反撥と連続及び非連続と表現による苦悩克服
- (四) 非連続の連続と蜻蛉日記の作者及び紫式部

第五節 源氏物語の古典主義的研究法..... 一三三

- (一) 古典主義的方法

- (一) 古典主義的研究法の開始と中世的基準
- (二) 中世仏教的基準と紫式部墜獄説
- (三) 中世の古典主義研究法と奥入
- (四) 宣長の古典主義方法の基準

第一章 源氏物語の構想 一七

第一節 源氏物語の構想と統一 一七

一 構想と主人公 一七

二 構想と事件 一八

三 構想と思想 二〇

第二節 源氏物語の構成の文芸的意義 二〇

一 源氏物語の構成と系図及び年立 二〇

二 源氏物語の物語群と並ぶの説 二五

三 源氏物語の短編性及び長編性と予言 二四

四 源氏物語の成立順序と構成 二四

第三節 源氏物語の構想試論 二〇

一	父為時の詩的影響と紫女の詩的教養……………	三四〇
二	正編の起・承・転・結の詩的構想観……………	三四四
三	続編の起・承・転・結の詩的構想観……………	三五一
四	全帖の起・承・転・結の詩的構想観……………	三五五
五	源氏物語の構想を内から窺ふもの……………	三六一
	(1) 王朝女性の内的苦惱……………	
	(2) 解体してゆく古代社会の矛盾と王朝貴族の依存的立場の危機感……………	
	(3) 浄土教の観相の世界と文芸……………	
第二章	源氏物語の生新たな文芸性……………	三六二
第一節	光君及び紫の君と幼時描写の文芸的意義……………	三六三
一	源氏物語の「子ども観」と光君の遊び……………	三六三
二	澄んだ紫の君の遊びと紫女の幻想的イメージ……………	三六九
三	幼時描写に見る貴族性と庶民性……………	三〇〇
	(1) 登場人物中特定の者の幼時描写をした意図……………	
	(2) 幼時描写の貴族性……………	
	(3) 幼時描写の庶民性……………	
	(4) 幼時描写と「もののあはれ」……………	

第二節 光源氏の恋愛に見る「若さ」と官能的及び幻想的表現技法……………三〇

一 雨夜の品定めに見る恋愛観の「若さ」と光源氏の恋の開眼……………三〇

二 夕顔の「若さ」と光源氏の恋の情炎……………三三

三 末摘花の「古さ」及び不変の真实性と光源氏の探恋癖の異相……………三八

四 紫女の恋愛に関する官能的及び幻想的表現技法……………三七

第三節 源氏物語の教育学問観と夕霧の学問及び初恋の文芸的意義……………三七

一 教育観……………三八

二 学問観……………三〇

三 夕霧の初恋の文芸的意義……………三九

第三章 光源氏の「たがひ目」に見る文芸的意義……………四四

第一節 須磨巻における「たがひ目」の文芸的意義……………四四

一 光源氏の「たがひ目」とその外在性……………四四

二 光源氏の「たがひ目」の内在性と須磨における精進……………四一

三 光源氏の「たがひ目」の問題点と文芸性……………四五

第二節 明石巻における「たがひ目」の文芸的意義	四二〇
-------------------------	-----

一 光源氏の宿世の更新と暴風雨	四二一
-----------------	-----

二 明石物語の出現と「たがひ目」の離脱	四三〇
---------------------	-----

第三節 賢木巻における「たがひ目」の因と恋愛及び宗教	四四二
----------------------------	-----

一 光源氏の「たがひ目」の因と賢木巻	四四三
--------------------	-----

二 恋愛のモラルと間隔的姿態	四四六
----------------	-----

(1) 「もののあはれ」と恋とモラル	
--------------------	--

(2) 儒学と恋愛のモラル	
---------------	--

(3) 神道と恋愛のモラル	
---------------	--

(4) 仏教と恋愛のモラル	
---------------	--

——非連続の連続の間隔観——

(5) 「ひとわりへ」と間隔	
----------------	--

(6) 嫉妬と間隔	
-----------	--

第四章 源氏物語の憂愁性の文芸的意義	四七五
--------------------	-----

第一節 源氏物語の死の描写の文芸的意義	四七五
---------------------	-----

一 源氏物語登場人物の晩年及び死の描写	四七五
---------------------	-----

二 構想上より見たる晩年及び死の描写	四九一
三 晩年及び死の描写に見る特色	四九六
第二節 源氏物語の孤独観の文芸的意義	五〇三
一 紫式部の孤独感	五〇三
二 源氏物語の孤独観の文芸的意義	五〇七
第三節 宇治十帖における仏教の文芸的意義	五七
一 宇治十帖の構想と仏教	五八
二 宇治十帖の環境と仏教	五三〇
— 薰及び八宮と宇治の阿闍梨を中心として —	五三〇
三 横川の僧都と浄土教	五四五
一人 名 索 引	五五九
二 書名・論文名索引	五六一

序論 源氏物語研究の方法

第一節 対象と方法

——本文と青表紙本及び河内本——

- 一 青表紙本重視の歴史的現実と根拠
- 二 価値観に立つ文献学的研究と文芸的研究——源氏物語と平家物語との比較
- 三 河内本の価値と問題点
- 四 親行校合の新古今集の八本と源氏物語の八本

一 青表紙本重視の歴史的現実と根拠

研究で大切なのは、いかに問題を発見し、それをいかに体系づけ、いかに論証するかということである。序論としての源氏物語の研究の方法としては、これを二つに分ち、前者は対象と方法について、後者は文芸的研究の方法について考えてみたい。後者についてはしばらく措く。前者については、一 青表紙本重視の歴史的現実と根拠、二 価値観に立つ文献学的研究と文芸的研究——源氏物語と平家物語との比較——、三 河内本の価値と問題点、四 親行校合の新古今集の八本と源氏物語の八本、の四段に分ち、池田亀鑑博士のご研究の中からそれと深い関連を持つ七つの問題点を抽出し、これを批判しながら、それに対立する新たな試論を立て、それを論証することによって前記の四段の

究明に努めたい。

源氏物語の研究も、その対象に問題を持ち、この問題の追究に意義と価値を見出し、その対象を凝視し、それに沈潜することから始まる。その対象は、もちろん源氏物語の本文である。それは、明らかにされたうち現存するものでは、青表紙本と河内本とがあるだけで、いわゆる別本（註）と称するものがその他にあるにしても、一聯の古鈔本があるわけではなく、雑然と孤立して系統を失ったまま分類整理されていないもので、研究対象としてのまとまった本文と見ることはできない。

源氏物語の本文として藤原定家の青表紙本が、何故歴史的にも最も重視されて広く用い行なわれ、現在もそれが持続しているかを先ず考えてみる必要がある。本文の比較的多く用いられたもの乃至は学問的価値高い本文の研究として、少し前に吉沢義則博士の「校源氏物語新釈」全六巻並びに索引二巻が完成し、最近には池田亀鑑博士によつて『源氏物語大成』全八巻が完成されたことは周知の通りである。前者は、「湖月抄本を底本とし、尾張徳川家所蔵の河内本を以て厳密に対校して本文を立てた。」（同書巻一凡例一頁）と、後に述べるように青表紙本によつた湖月抄本を底本として河内本を対校し本文を立てたことを明らかにせられ、後者は、「前記ノ諸本ノ異文ヲ標記スルタメニ、ソノ中カラ底本トスベキモノヲ選択スルニ当ツテハ、厳密ナ考証ヲ重ネタ結果、藤原定家ノ青表紙本ヲ以テ之ニ当テルコトトシ、花散里・柏木・早蕨ノ三帖ハ現存スル定家本ヲ用キタ。ソノ他ノ諸帖ニ於テハ、現存諸本中定家本ノ形態ヲ最モ忠実ニ伝ヘテキルト考ヘラレル大島本ヲ用キタ。」（大成巻一校異篇凡例五頁）として、定家本乃至は定家本に最も近い大島本を底本としたことを述べ、河内本を対校しておられる。池田博士が、定家本及びそれに最も近い大島本を特に重視されるのは、それが最も純粹で原本の面目を如実に伝えたとする推論からである。もっとも池田博士は、最